

「から」と「ので」について (一)

-日本語教育の立場から-

A Study of “KARA” and “NODE”

長 友 文 子
NAGATOMO Ayako

2002年10月10日受理

(1) : 問題提起

「おまえ、人間なので、飛べないよ。」という会話文を書いた留学生がいた。日本語常用者なら、多分、「人間だから、飛べないよ」と、「から」を使う人が多いだろう。だが、「なので」を用いた上記の文も、誤文とはいえない。

互いに似た機能や意味をもつ言葉には、二通りの場合がある。例えば、「ここへ置きます」の「へ」を「に」に置き換えて「ここに置きます」としても、後者の文は誤文にはならないし、含蓄された意味は変わるが、特に談話においては、伝達に支障をきたすほどではない。それに対して、「ここにあります」を「ここへあります」とすると、誤文になってしまう。

原因や理由を表す助詞「から」と「ので」は、共によく使われる言葉であるが、それらについても、同様なことがいえる。

「から」と「ので」では、互いに置き換えることが可能な場合が多く、また、ほとんどの場合、置き換えることによって意味がはっきりと変わることはない。「寒いから、窓を閉めます」の「から」を「ので」に置き換えると、「寒いので、窓を閉めます」となるが、日本語常用者は、特に意識しないで、両者を使っている。その意味上の違いは非常に微妙なので、日本語学習者が意識して使い分けようとする、大変難しい。

一方、「寒いからです」を「寒いのです」とすると、誤文となる。こちらの違いは、日本語学習者が学ぶべき事項に含まれる。

小論では、日本語教育の立場から、この点に焦点をおいて、「から」と「ので」について考察してみたい。

(2):「から」と「ので」のちがい

国語学的には、原因・理由を表す「から」「ので」は、次のように説明されている。

すなわち、「から」は、格助詞として体言に付いて理由・原因を表す(例「風邪から熱が出た」)他、接続助詞として用言(活用語)の終止形に付く。一方、「ので」も接続助詞として、用言の連体形に付く。接続助詞は、前句が確定条件か假定条件か、後句が順接するか逆接するか、にそれぞれ二分しうるが、その分類によれば、接続助詞「から」「ので」は、共に「確定条件・順接」に分類され、また意味的にも共に「原因、理由」を表している、両者の違いは少ない(『国語学大辞典』東京出版1980)。

例えば『広辞苑』(岩波書店1955)には、「ので」は「自然の成り行きで次のような結果になるということを示すのに用いる」という説明がある。しかし、「から」についても、「一説では」としながらも、「から」は「やから」「はらから」などの「から」と同源だとして、「自然の血のつながった一族という意味から筋・素性・自然のつながりという意味を派生し、更に自然の成り行きの意から「おのずと」という使い方が生まれ、一方では出発点を表すように広がり、そこから原因・理由を表す使い方ができたという」とあって、「自然の成行き」という語意あるいは語源に関しても、両者に大きな違いはない。

では、「から」と「ので」の意味上、機能上の違いは、どこにあるのだろうか。

例えば『日本語大辞典』(講談社1989)では、「一般に「から」が、発言の根拠として主観性の強いのに比べ、「ので」は、客観的に事態を説明する」とされている。

この問題については、国語学の場でお議論が続いているようだが、この『日本語大辞典』の記述は、これまでの基本的な意見とされている、永野賢の見解を基にしている。そこで、『古代語現代語助詞助動詞詳説』の永野論文(注①)によって、彼の説明を整理してみよう。

永野は、「から」は「理由・原因」を表わし、「ので」は「原因・理由・根拠・きっかけなど」を表わす点で、両者は基本的には「ほぼ同じ意味」であるという。その上で彼は、しかし両者を比較すれば、そこには次のような違いがあるという。

すなわち、彼はまず、「から」は、表現者が前件と後件が原因と結果等の関係にあることを「特に強く、いわば主観的に示そうとする語気が伴うことが多い」として、次の例文を挙げる。

例文1 生活の根が浅いから、薄っぺらな感じだ。

例文2 電車事故がありましたから、遅刻しました。

一方、「ので」は、前件と後件とが、原因・結果等の関係にあることが、「表現者の主観的判断によらなくても明白な事実であるような場合に多用される。従って条件としての独立性は「から」よりも弱」として、次のような例文を挙げている。

例文3 さんざん動きまわったので、腹がぺこぺこだ。

例文4 あんな元気な人が急死したというので、びっくりしました。

だが、「主観」「客観」とは、何を基準として分けているのだろうか。永野は、「から」文では前後件の「結びつきは話し手の判断作用に」より、主観が「責任をもつ」関係であるのに対して、「ので」文では前後件の結びつきに「主観性の責任がない」と補足説明をしているが、分かりやすい説明ではない。

例えば、例文2の「電車事故がありましたから、遅刻しました」が主観的な判断で、逆に例文4の「(あの人が) 急死したというので、びっくりしました」が、主観的判断によらない「明白な事実」だ、といった説明は、簡単には理解しがたい。

ところで、上記例文の「から」は「ので」に置き換えられる。逆に「ので」も「から」に置き換えると誤文になるとはいえない。両者に意味の微妙な違いはあっても、少なくとも初級の段階から日本語学習の場面で使い分けるほどの違いがあるとはいえない。

さて、永野は、以上のような「主観・客観」説を基礎としながら、更に以下のように、両者の違いを説明してゆく。

1) 後件が推量・命令・勧誘などの場合の「から」

「から」は「既定の順接条件という意味では「ので」に近いが、後件が推量・命令・勧誘など、表現者の主観に属する事がらである場合は、「から」が用いられ、「ので」は用いられない」、として、次の例文が挙げられる。

例文5 夕焼けだから、あすはいいお天気になるだろう。

例文6 あぶないから、やめなさい。

推量・命令・勧誘は主観的な事がらだから「から」を用いるという説明である。しかし、挙げられている例文も、「ので」に換えれば完全な誤文になるとまではいえない。例文6は、「夕焼けなので、あすはいい天気になるだろう」といかえても違和感が薄い。特に談話においては、イントネーションの効果などで、「ので」が使われても自然な場合がある。

2) 原因・理由を補足的に述べる「から」

また、永野は「「ので」は条件としての独立性は「から」よりも弱く、結果や帰結をさきに述べてから「のでだ」「のでです」の形で原因・理由を補足的に述べる用法はない」と言い、逆に「から」には、「「からだ」「からです」の形で、理由・原因などをあとから補足的に述べる用法もある」と言って、次の例文を挙げている。

例文7 その時刻には参れません。あいにく用事があるからです。

確かに「用事があるのです」とは言えない。だが、「用事がありますので」とは言える。ここでもあえて「条件としての独立性」が弱いこと、つまり客観的な結合だなどと、「主観・客観」説にそった説明をしなくてもよいのではないか。

3) 理由だけ述べて、帰結を言外に暗示するような、終助詞的な「から」

例文8 じゃあ、ぼくはこれで帰るから。

ここでは、「主観・客観」説による説明はなされていないが、この例文も、「ぼくはこれで帰る

ので」と言い換えても誤文にはならないだろう。「じゃあ、わたしはこれで帰りますので」の場合
はもっと自然である。

4) 「からには」などの形で、理由・原因を特に提示する「から」

永野は更に、「「からは」「からには」「からって」などの形で、理由・原因を特に提示する用法
もある」といい、次の例文などを挙げる。

例文9 おれがついているからは (以上ハ)、安心していいよ。

確かに、「おれがついているので」とは言えるが、「おれがついているのでは」といった強調し
た言い方はできない。「主観・客観」説から、例えば、独立性の強い条件の主観的な強調だ、と
いった説明をするのか、単に慣用だとしておくかは別として、ここでは永野の指摘通りである。
永野は挙げていないが、「からこそ」もそうである。

5) 丁寧表現としての「ので」

一方、永野は、「後件が依頼・勧誘など、表現者の主観に属する事がらである場合でも、丁寧表
現の際は、「ので」を使うことも多い」、として、次の例文を挙げている。

例文10 このたび下記に移転開業いたしましたので、なにとぞよろしく申し上げます。

慣用では確かに例文のように書くだろうが、談話の中では、「いたしましたから」としても決して
誤りではないだろう。

以上、接続助詞「から」と「ので」の関係を、永野論について見てきた。

「から」「ので」の違いについては、永野の「主観・客観」説がなお有力でありつつ、問題点も
多く指摘されている。「から」は主観的で「ので」は客観的といった説明については、何を基準に
そういえるのか、判断できない文が多い。

例文11 引力があるからリンゴが落ちるのです。

例文12 感激したので拍手しました。演奏がすばらしかったので。

という文について、例文11の「から」は主観的判断を示し後から理由などを述べる用法もあり、
例文12の「ので」は客観的な判断を示す、といった説明を初級学習者に分かってもらうのは大変
難しい。

「ので」の方が丁寧さが高いということについても同様である。

例文13 今日は暑うございましたから、冷たいお飲物のご注文を多く頂きました。

これは大変丁寧な言い方だが、談話の場面では、不適切な言い方ではないだろう。

確かに、「から」と「ので」の間には、意味や丁寧さの上で微妙な違いがあるだろうし、国語学
的には、その微妙な違いを確認することも重要であろう。

だが、初級学習者が、その違いを基に、「ので」と「から」を区別して使い分けることは大変難
しい。大抵の「から、ので」文は、置き換えても完全な誤文とはならないし、意味の変化は微妙
なニュアンスの違いにとどまる。

もちろん、全てが同じではない。「から」は用言の終止形に付くが、「ので」は連体形に付くと

いうことは、「から」「ので」の基本であり、日本語教育の場でも、当然教えるべき事柄である。

また、「からです」を「のでです」にしたり、「ぼくが来たからには」を「ぼくが来たのではありません」とした場合のように、置き換えによって誤文となるものもある。そういったものについては、初級か中級かで、きちんと教える必要はある。

だが、どちらを使っても誤文とはならない場合、両者の微妙な意味の違いは、初級段階の日本語学習者に教えるべき事柄とはいえないのではないか。

初級学習者が知りたいことは、1)意味や機能に違いはあるのか、2)どちらを使っても(置き換えても)いいのか、3)一方だけしか使えないのはどういう場合か、ということである。初級段階で必要なことは、これらの疑問に、はっきりした指針を示すことであろう。

(3) : 教科書での「から」「ので」の扱い

それでは、日本語の初級段階での教科書では、「から」「ので」は、どのように扱われているだろうか。いくつか取り上げてみよう。

1) 石沢弘子・豊田宗周監修『みんなの日本語初級 I・II』(スリーエーネットワーク、1988)

この教科書では、9課で「から」が扱われており、2つの文章を因果関係を表すために結びつけると説明されている。一方、「ので」は39課で取り上げられ、文法書で次のように説明されている。すなわち、「ので」は「から」と同じく原因と理由を表すが、「から」が原因または理由を主観的に表すのに対して、「ので」は因果関係を自然の成り行きのように客観的に表す。また、「ので」は話し手の意図を和らげ、聞き手に威圧感を与えない。「ので」は許可、言い訳をする場合に用いられる。このように、永野説を基礎として、両者の意味の違いについて、かなり詳しく説明している。

ただし、そこで挙げられているのは、次のような例文である。

例文14 時間がありませんから、新聞を読みません。

例文15 どうして朝新聞を読みませんか。・・・時間がありませんから。

例文16 用事があるので、お先に失礼します。

これらの文の「から」と「ので」も、互いに置き換えても、談話の中では誤文になるとはいえないだろう。取り上げられている例文の「から」や「ので」を置き換えれば誤文になったり、明白に意味が変化するという場合には、「から」と「ので」の違いについての国語学的な説明も生きてくるだろうが、この教科書の例文はそれらには当てはまらない。どのように教えることが期待されているのであろうか。

2) 文化外国語専門学校日本語課程『新文化初級日本語 I』(凡人社、2000)

この教科書では、13課で「から」、14課で「ので」と、連続して主題的に扱っているが、両者の関係についての説明はされていない。

13課「から」では次の例文が挙げられている。

例文17 「どうしていいと思いますか。」「安全だからです。」

例文18 「楽しくありません。」「どうしてですか。」「友達が少ないからです。」

これらの例文の「から」は、文末に置かれた「からです」という形で、「ので」には置き換えることができないが、「です」をとれば談話上は誤文ではなくなる。

一方、14課「ので」では、次の例文が挙げられている。

例文19 のどが痛いので、病院へ行きます。

例文20 寒いので、窓を閉めてもいいですか。

これらの例文でも「ので」も、「から」に置き換えることができる。この教科書でも、置き換えが「できる／できない」ということについては、説明がない。

3) 鈴木忍・川瀬生郎『日本語初歩』(凡人社、1981)

この教科書では、27課で、主題的に「から」と「ので」を扱っており、六つの文型を取り上げて、例えば次のような例文が挙げられている。

例文21 雨がふっていますから、かさをかしてください。

例文22 明日試験があるので、みんな勉強しています。

例文23 どうして行かないのですか。用があるからです。

「ので」「から」をセットにして、更に「のに」も含めて、課のテーマとしている教科書は珍しい。また、基本的な文型を、比較して学ぶように工夫されている。が、ここでも、「のでです」以外は、「から」と「ので」を置き換えても誤文にはならない。

この教科書では、「から、ので」だけでなく、「て」「のに」も同じ課で取り上げている。比較して学べる点で優れた整理の仕方だと思われるが、それだけに、学習者が、「暗くてよく見えない」「暗いからよく見えない」「暗いのでよく見えない」は全ていえるのか、意味に違いがあるのか、あるとすればどう違うのか、といった疑問を持った場合、教員はこの段階での学習者に説明することは難しいだろう。

以下にあげる教科書は、英語とローマ字を用いており、次のようなものがある。

5) 坂野永理他『An Integrated Course in Elementary Japanese げんき I』(The Japan Times、1995)

この教科書では、6課で文末の「から」が扱われ、12課で文中の「ので」が、それぞれ主題的に扱われる。

この教科書は英文で書かれているが、「意味の上では、「ので」は「から」と全く同じである。が、文体としては、「ので」は「から」よりすこしだけ改まって(フォーマルに)聞こえる」という説明があり、次のような例文が挙げられている。

例文24 私は今晚勉強します。あしたテストがありますから。(英訳省略、以下同じ)

例文25 いつも日本語で話すので、日本語が上手になりました。

これらの例文の「から」と「ので」も置き換えられる。

6) 水谷修・水谷信子『An Introduction to Modern Japanese』(The Japan Times, 1997)

この教科書では、7課に「から」、8課で「ので」の例文が入っている。

例文26 どうぞおかまいなく。すぐ失礼しますから。

例文27 ちょっと失礼します。客がまっていますので。

7課では、「から」は理由を示すのに用いられるが、その理由は感情的、心理的なものなので、英語では表現されるときは限らないと説明されている。また8課では、「ので」は理由を表し、「から」と比較すると機能的には同じであるが、「ので」の方がより控え目で丁寧聞こえるといわれている。

「ので」の方がより控え目で丁寧だという説明は、5)の説明とほとんど同じである。だが、例えば例文33と例文34を比較して、後者の方がそうだとはいえるかどうか。日本語常用者でも判定が困難な違いを、初級学習者に説明して教える必要があるか疑問が残ろう。

以上、初級の段階でよく用いられている教科書について簡単に検討した。初級段階で使用される教科書には、自習用(学習者が文法説明を読みながら自分で学習するもの)もあり、教室用(教師の文法説明が期待されるもの)もあるので、教科書に文法説明があるかないかは大きな問題ではないが、冒頭に述べた「から」「ので」の置き換えについて、例文や練習問題などで明確な姿勢が感じられる教科書は見あたらなかった。

(4) : どのように教えるか

初級の教科書は必要最低限の文法項目を短時間で導入することが目的なので、多くの学習時間は想定されていない。

従って、初級段階では、文法的な事項については、詳しい説明は省かれることになる。学習時間数も少なく、語彙や既習の文法項目が少ないので、特に「から」「ので」のように、日本語常用者にとっても曖昧なものについては、詳しく教えるのは不可能である。

だが、「から」「ので」は基本的な接続助詞なので、初級の段階でも、ある程度明確に使えるようになっておくことが必要である。ところが、学習時間が十分に想定されていない初級の段階では、必要最低限の文法項目を短時間で導入することが目的なので、初級教科書には、文法的な事項についての詳しい説明は省かれている。特に「から」と「ので」の違いは日本語常用者にとっても曖昧であるということは、見方を変えれば、その使い方の許容度が高いということでもある。

このことをふまえて、少なくとも初級段階では、以下に示すような必要最低限の使い方を教えた方が効率がよいだろう。

1) 「から」「ので」は、2つの文章をつないで、原因・理由を表す

基本形は、[前文+から (ので)、後文]

例文28 雨が降っているから (ので)、出かけません。

「から」も「ので」も使える。「から」「ので」は、動詞、形容詞に付くが、「から」は終止形、「ので」は連体形に付く。

2) 基本形の前文と後文を入れ替えて、倒置形にすることができる。

例文29 川が増水しています。雨がふったから (ので)。

ただし、倒置形で「からです (でしょう)」といえるが、「のでです (でしょう)」とはいえない。

例文30 今日は月がきれいです。十五夜だからです。○

今日は月がきれいです。十五夜なのでです。×

3) 前文が推量の場合、「ので」は使わない。

例文31 降るでしょう (だろう) から、傘が必要です。○

降るでしょう (だろう) ので、傘が必要です。×

「から」と「ので」については、なお、次のような使い方の制限や微妙な意味の違いがあるが、それらは中級以降で学ぶ。

○「から」の後には、「こそ」「には」「か」「だ(ろう)」などが付けられるが、「ので」には付けられない。

○基本形の前文を独立させて、後文の文頭に接続詞として「だから」をおくことができる。(「なので」については後述する。)

○後文が命令形のときは、「から」を使うことが多い。

○「ので」の方が丁寧さが比較的強い。

○「というので」という慣用句がある。

実際、これらに該当する例文は、初級教科書では取り上げられていない。時間の限られた初級段階では、これらについては扱わず、最低限上の3項目だけに絞って教える方が効率的ではなかろうか。

(5)：終わりに

「ので」と「から」の間の意味上の微妙な区別を細かく検討することは、国語学的には重要であろう。しかし、両者の関係については、なお議論が続いており、両者の機能や意味の間に、はっきりした線をひくことは難しい。

例えば、『さまざまな表現』(注②)では、「ので～てください」「ので～ましょう」などには、「地域や年代によって揺れがある」文として、?マークがつけられている。実際、「暑いので窓を開けてください」や「暑いので窓を開けましょう」は、誤文とはいえないだろう。また、「ので～なければなりません」や「ので～たほうがいい」が誤文とされているが、しかし、「あなたはやせているので、もっと食べなければなりません」「あなたはやせているのでもっと食べた方がいい」などが誤文だとされているのは、厳しすぎるだろう。

生きた人間が現実の生活の中で使用している言葉には、揺れがあって当然である。時代により、言葉は変化してゆく。旧論(注③)でも既に指摘したが、「誤文」という概念を、社会言語学的に捉える必要がある。「から」「ので」の間の微妙な違いについても、<許容できるかどうか>という尺度で測る必要がある。

例えば、次の文はネット上で見つけたものである。

例文32 基本的にDCの電気は、プラス側から出てマイナス側に帰って来るのです。なので、プラス側の端子から、(略)電気が流れないのです。ですので、アース線を太くする、アースを一杯取ると言うことになるのでしょう。

文頭に現れる「なので」「です

初級の段階で扱われるような文型では、「から」「ので」の違いは、日本語常用者も迷うような微妙なものがほとんどである。互いに置き換えることで許容できない誤文になるのは、「のでです」などの表現に限られる。

小論で取り上げた「から」「ので」は、初級段階ではそれほど重要な文法項目に入っていない。また、実際に初級を担当している先生方は、「ので」「から」に時間をかける余裕はないであろう。日本人でも迷うような微妙な違いにとらわれずに、同じ課で、最低限教えなければならないことを、きちんとわかりやすく教えるのが、効率的な教授法だろう。

注① 『古代語現代語助詞助動詞詳説』「助詞編 (433~438)」

注② 『日本語教育演習シリーズ③ さまざまな表現 Vol.1』丸山啓介 凡人社 1995

注③ 『「の」による名詞省略について』長友文子 日本語教育学会 1997

参考文献

- 1 『現代語法序説』三上章 くろしお出版 1972
- 2 『国際学友会日本語学校紀要』7 「「から」及び「ので」の用法」伊藤勲 国際学友会日本語学校 1982
- 3 『古代語現代語助詞助動詞詳説』松村明編 學燈社 1969
- 4 『日本語の文法 (下)』寺村秀夫 国立国語研究所 大蔵省印刷局 1981
- 5 『日本語類義語表現の文法 (下)』宮島達夫・仁田義男 くろしお出版 1995